

博物館だより

No.61

平成23年5月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

博物館友の会 会員募集!

みやこ町歴史民俗博物館友の会は「故郷を楽しく学ぶ」をモットーに講演会やバスハイク、史跡巡りなどさまざまな行事を行っています。意欲のある方であればどなたでもお気軽に参加いただけます。ぜひご入会ください。

入会の方法

博物館の窓口で会費を納めてください。

年会費

個人会員 3000円

家族会員 1名2000円

お問い合わせ先

みやこ町歴史民俗博物館内
友の会事務局

友の会総会は5月15日

平成23年度博物館友の会の総会を次のとおり開催致します。会員の皆さまは万障お繰り合わせの上ご出席ください。

【日時】平成23年5月15日(日)
午前10時00分～

【場所】当館研修室

【記念講演会】

講師 当館学芸員 川本英紀
演題 「小倉細川藩の牧場経営」

歴史学習DVD

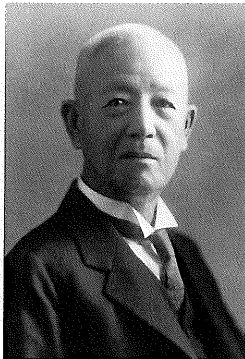
みやこの歴史発見伝!

みやこの先人の

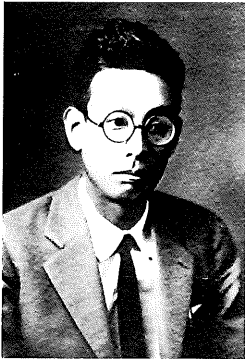
現在のみやこ町出身で、後世に名をのこした先人を顕彰するDVD「みやこの歴史発見伝!みやこの先人」が完成しました。

ナビゲーター役の女性が先人ゆかりの土地や人を訪ねながら、その人生と業績を紹介する内容で、10名の先人を取りあげて、1名につき1本、計10本の映像ソフトにまとめました。先人を切り口にわが町を見ると、驚くような

◆NEC創業者・岩垂邦彦



◆プロレタリア作家・葉山嘉樹



発見がいつぱいです。郷土を愛するには先ず郷土を知ることから。ぜひ、「みやこの先人」をお手元に!

DVD収録の先人10名

- 岩垂邦彦(NEC創業者)
- 小宮豊隆(独文学者・漱石門下)
- 堺利彦(日本社会主義運動の父)
- 下枝董村(異才の書家)
- 鶴田知也(芥川賞作家)
- 中村春堂(かな書道の名手)
- 葉山嘉樹(プロレタリア作家)
- 吉田学軒(元号、昭和創案者)
- 吉田健作(近代製菓業の父)
- 吉原古城(書家・漢学者)

■販売価格 1枚1000円

■販売場所 当館カウンター

《古文書解読コーナー》

① 手際が悪い

〈ヒント〉手際が悪い

② 話し合っ

〈ヒント〉話し合っ

③ 福を祈る

〈ヒント〉ごちそう。もてなし

④ 本殿の前に設ける

〈ヒント〉冥福を祈る

⑤ 反対向きに見て

〈ヒント〉本殿の前に設ける

◎答え

(反対向きに見て)

- ① 不調
- ② 決断
- ③ 懸念
- ④ 供養
- ⑤ 掛軸

みやこの歴史発見伝 47

福岡県指定文化財

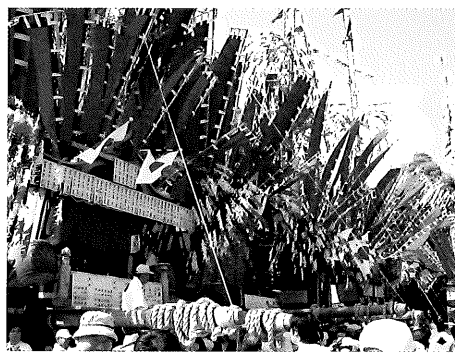
「生立八幡神社山笠」行事

再録版

◎今年は五月六日(金)〜八日(日)に行われます。
◎七日・八日の午後三時頃から山笠が動きます。

犀川地区を代表する祭り

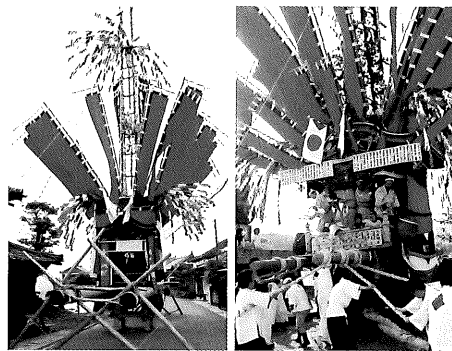
「音に聞こえし犀川夜市(山笠)」。昔からこう言いならわされてきた犀川神事こと生立八幡宮神幸祭は毎年五月第二日曜を最終日とする三日間繰り広げられ、犀川地区を祭り一色に染めあげます。この祭りの呼び物はなんと、いっても、その迫力が圧倒的なことで知られる山笠行事において外になく、県下でも随一といつてよいこの古風を伝える山笠行事の特色を以下簡単にご紹介してみよう。



▲祭り当日、神社前の馬場に勢揃いした山笠

神幸祭と山笠の歴史

山笠が奉納される神幸祭自体は、お宮が現在地へ移転した治暦三年(一〇六七)から始まったと伝えられています。神社のご祭神(八幡様・応神天皇)が最初に祀られたとされる犀川大村の立屋敷には二子石とよばれる霊石があり、ご祭神にとつてはここが「実家」であるとともに一種のパワースポット(神通力の供給源)となっており、年に一度ここに「里帰り」することで、ご祭神は新たな命を蓄えてリフレッシュ(「みあれ」ともいう)し、ムラの平安を保つエネルギーを回復する、といわれています。そのご祭神の里帰りに随行するお供の神様たち(生立社を犀川総鎮守と仰ぐ村々の産土神)の乗り物として設けられた装置が山笠の始まりとされ、その装置は当初「柴山」とよばれる、神輿状の担い棒に大きな「ホテ」と呼ばれる藁束をのせ、これに櫓を挿したごく簡単なものであったといわれています。これが時と共に様々、風流(飾り



▲昇山(左:谷口区奉納)と曳山(右:続命院区奉納)

付け)が加わり、担い棒が大八車に、ホテがやぐらへと変化し、ついには現在のような山笠へと「進化」したとされています。進化の様子をはっきりと物語る詳細な記録などは残されていませんが、断片資料や各地の古い祭りとの比較から、現在のような形になったのは江戸時代初め頃と考えられ、その変化の時間たるや数十年・百年単位のかなりゆつくりとしたものだったようです。それでも数少ない変化の記録には興味深い事実が記されていて、江戸時代後期の享和三年(一八〇三)には山笠に人形が飾られ、現在見るような幟山笠のスタイルではなかったことが記録されるほか、奉納ムラも現在より少な目だったようです。さらにその頃の奉納時期は現在でいう九月一日で、旧暦ではこれが八月一日(朔日にあたることから、祭りの呼び名を「八朔神幸」といい、残暑

厳しい中汗だくの山笠奉納が行われていたということが知られます。

現在の山笠のスタイル

さまざまな変化を受け入れつつ、山笠は今見るような姿へと変容したようですが、現在の姿はおよそ次のようなものとなっています。

まず種類として曳山と昇山の二つがあり、曳山は樹齢三〇〇年級の巨木から作った直径一・五mほどの車輪を四つ付け、レンガ網と呼ばれる大蛇のような網に曳かれて動きます。続命院区と山鹿区奉納のものがそれで、前者は特に「親車」と呼ばれて山笠集団の先導を務めることにもなっています。また昭和三〇年頃までは、山鹿区の曳山が今川の流れを横断し、田川市の川渡り神幸祭にも劣らぬ壮観を展開していたといえます。

一方、昇山については幾分装いが異なり、車輪はなく、高さ5mほどの四本柱のやぐら造りの骨組みに、大棒とよばれる電柱並の巨大な柱を二本横にわたして神輿のように担ぎ上げるスタイルをとります。実際には大棒に直交する形で昇棒と呼ばれる横木を渡して力点とし、九〇人前後の人数でこれを担ぎ上げるのです。骨組みだけでも相当な重量なのですが、これに様々な飾り立てを施すことで一層の重みと荘厳さが加わります。緋色の幟やラシャの色引幕、ヤナギや彫物・御殿造の破風といったものがそれですが、これに依代(神様のよるべ)として一五m近くある柱二本(オオダシ・コダシ)を加えることで風流の限りを尽くした神の乗物としての山笠が完成します。



▲山笠飾りの一つ「彫物」(左:カシ・右:牡丹)

こうして完成した山笠は太鼓や鉦の音が響く中、木遣の采配の下、昇手衆の息が揃って初めて四トン近い巨体がようやく地を離れるのです。



▲担ぎ上げの瞬間、気合の叫びが響きわたります